フューネラルビジネスフェア2009
葬祭ビジネスの最新情報を発信

『月刊フューネラルビジネス』を発行する綜合ユニコム主催の「フューネラルビジネスフェア2009」が、6月25(木)・26(金)の両日、横浜市西区みなとみらいのパシフィコ横浜(展示ホールB)で行われた。

今回のメインテーマは「『葬儀力』新しい葬祭サービスの〝心〟と〝かたち〟」。気鋭の葬祭関連事業者たちによるシンポジウムや生花祭壇の設営講習、死化粧実演、葬儀スタッフの身だしなみ講習会などが多彩に展開された。

総合展示会には100を超える企業が参加。来場者は熱心に各社の製品を見学したり、ビジネスモデルに関する質問をしていた。

以下、記者の目に留まったいくつかのブースを紹介してみよう。

地球環境の保全に配慮した商品

環境問題に対する意識は、一般の消費者や企業に深く浸透しつつある。今後は、葬祭関連事業もこの潮流に直面することと思われるが、棺や祭壇、生花、ドライアイスなどはなかなか「エコ化」せず、従来品が広く使われているのが現状だ。

エコ棺では、トライウォールジャパン㈱(東京都千代田区)が平成18年に世に出した「エコフィン・ノア」が先駆けである。同社は今回、新作の「エコフィン・ウィル」を展示し、注目を集めていた。「ウィル」は高知県の四万十川流域から出るヒノキの間伐材を集成材へと加工したものである。集成材と言っても現在の技術は非常に優れているため、表面は「美しい」の一言。しかも、芯材に同社のトライウォール・パック(三層の強化段ボール)を使用し、軽量化と省資源化という同社のコンセプトが見事に踏襲されている。実際にエコフィンを見たことがない一部の人からは「ほんとうに段ボールの棺?」と言われることもあるほど、「ウィル」の外見はヒノキの棺そのもの。「外見」を気にする喪家にも受け入れられるのではないか。燃焼時間も従来品に比べて早い。

同社が優れているのは、環境対応商品を開発するだけではなく、特約店とともに植林事業を継続している点であろう。〈トライウォールジャパン:☎03-3519-5118〉

エコ棺市場に、新機軸が登場した。「共生を創出する」を会社運営のキーワードとする㈱シムビオシス(兵庫県西宮市)の「籐棺シムビオシス」である。

籐(ラタン)はヤシ科の多年生植物の総称。樹木ではないものの、直径数センチの幹(多くは蔓状)が頑丈なため、アジア圏では古くから家具の材料として使われてきた。曲げにも強いため、「曲線」はラタン製品の特色でもある。

籐のいいところは、素材として使用可能になるまでに、わずか数年で成長することである。また、人間の手で編めるため、機械で加工する木工品に比べ、電力の消費量が少ない。

籐棺には「曲線」が採用され、棺に視覚的な柔らかさを与えているようだ。棺の取っ手が側面に合計6個付いているため、棺の下に手を入れる必要がなく、持ち運びが便利と思われる。安価な棺では底面がささくれ立っているため、トゲが刺さることもあるが、取っ手で持ち上げられるため、トゲの心配もない。むろん、籐棺の表面は滑らかである。

籐棺は、エコロジーな商品と言うことができそうだが、同社の小林望社長は「欧米では、すでにラタンの棺が使用されています。環境意識が進んでいるためでしょう」とのことである。〈シムビオシス:☎0798-38-3188〉

生花祭壇の生花節約、という観点か

籐製の棺